

本計画では来るべき災害に備え、新しい防災船着場のあり方を提案する。

五街道の起点であった日本橋を布石として他の防災船着場も更新し、都市の輪郭を描くように水上交通インフラが推進されることを目指す。

とゆうそう 都邑湊

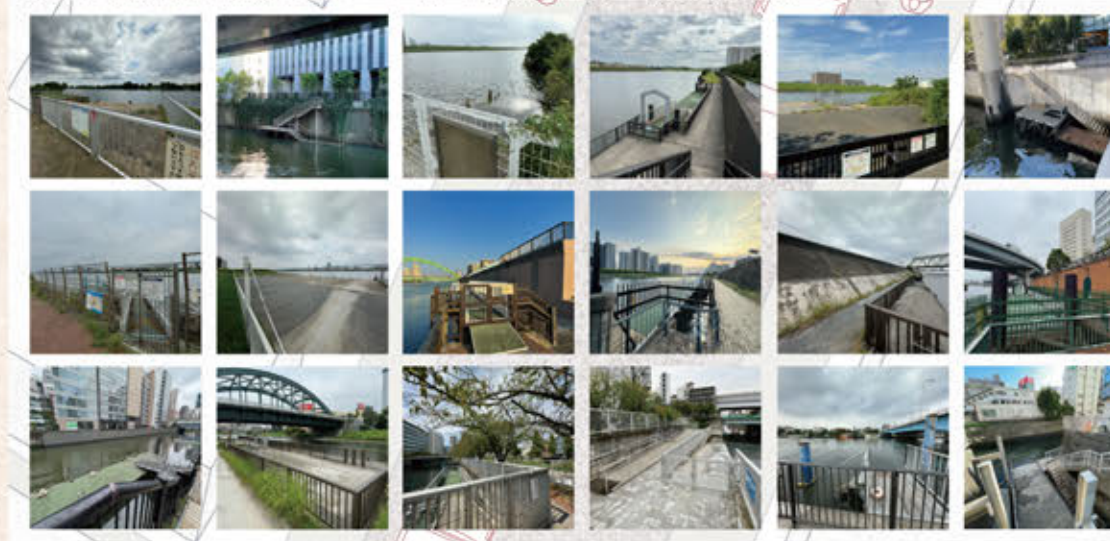
—水上交通インフラを見据えた防災船着場の更新計画—

災害時の物資・人員輸送の拠点として設けられた防災船着場は、日常利用されないために認知度が低く、災害時に有効活用されないのが現状である。

災害国である日本に住んでいるにも関わらず、守られた都市で暮らす私たちはどこか安心して日々を送っている。

災害時の物資・人員輸送の拠点として設けられた防災船着場は、日常利用されないために認知度が低く、災害時に有効活用されないのが現状である。

04. 卒業研究 | 認知されづらく、利用されない防災船着場



卒業研究では85カ所の防災船着場を対象として、日常利用の面から調査を行った。防災船着場とは、災害時に船による人員・物資輸送の拠点となる場所である。しかし認知度が低く、日常的に利用されない場所がほとんどであり、災害時に有効活用されないのが現状である。一方、なかには防災船着場が日常的に利用されているために認知度が高く、川と都市に緩やかな繋がりがある場所も見られた。

05. 調査 | 柔らかな境界と水景の記録



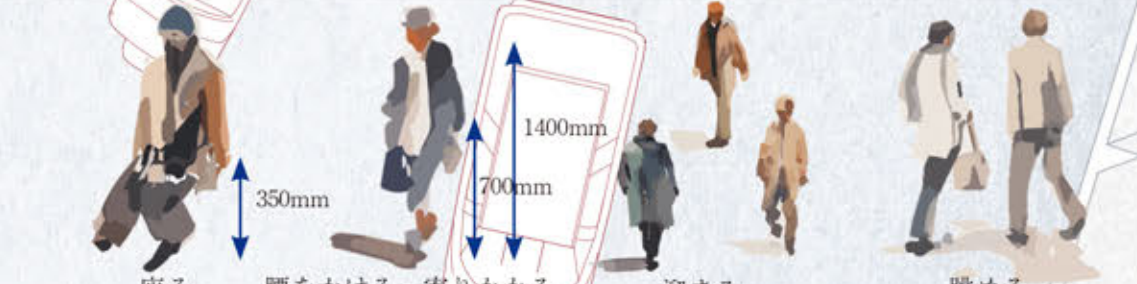
東京都に点在する防災船着場のフィールドワークを行った際、垂直護岸で街と川が仕切られた場所が多いなか、人の居場所となっている防災船着場がいくつか見受けられた。そこで街と川の境界に人のふるまいが見られる要素を調査するべく、スケッチを用いて記録を行った。その結果、屋根のあるスペースや座れる階段、整備された斜面など、小さなカタチの付与や変化が人のふるまいに大きく繋がっていることがわかった。

06. 仮説 | 強くても柔かいインフラ



江戸時代の川沿いは水害を受けやすい一方、都市の表として人々が集まる弱くて柔かい境界となっていた。現代の東京では水害を防ぐために人のふるまいの入り込む余地のない強く固い土木で守られている。災害が危惧されながらも東京に残っている貴重な資源(河川)が再注目されているなか、これからの境界には強くても柔かいインフラが求められるのではないかと。

07. 手法 | 所作を導く形態



「柔かい境界と水景の記録」から、境界が日常の一部となる所作を抽出し、その所作を導く形態を整理した。それらの形態を水害から守るために建てられた土木スケールの堤防に挿入することで、固い境界が身体スケールな柔かい居場所となることを目指す。境界に登え立つ大きなハコをつくるのではなく、座る場所や腰を掛ける場所、眺める場所など所作を誘発させる形態から空間をつくる。

00. はじめに | 逃げな災害への意識



守られた都市で生活する私たちは、どこか安心して日々を送っている。想定を超えた被害を受けたとき、私たちは自然への畏怖を再認識する。災害国である日本で暮らしているにも関わらず、災害をまるで他人事のように捉えている人が多いのではないだろうか。

01. 背景 | 再注目を浴びる水上交通インフラ



速さが求められた現代は自動車や電車など、陸上の交通インフラが大部分を占める。一方、かつての江戸時代は魚河岸など川沿いが都市の表として機能し、舟運で賑わっていた。現在の東京の河川は堤防で遮られたり、高架下に隠れたりなど都市の裏側となり、その頃の名残は見られないが、いまだに多くの河川が残っている。近頃は2023年10月に豊洲-日本橋間で通航航路が開通したように、水上の交通インフラが注目を集めている。移動手段のひとつとして舟運にも少し目を向けてみる。

02. 計画 | 日常利用可能な防災船着場への更新

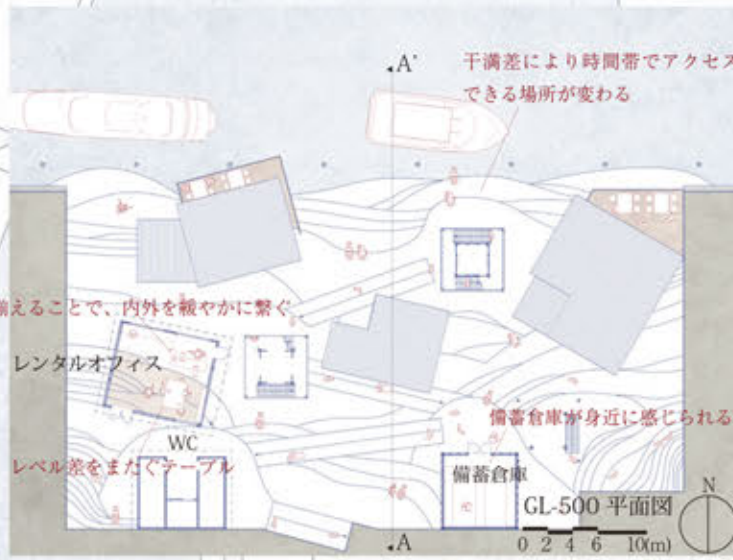
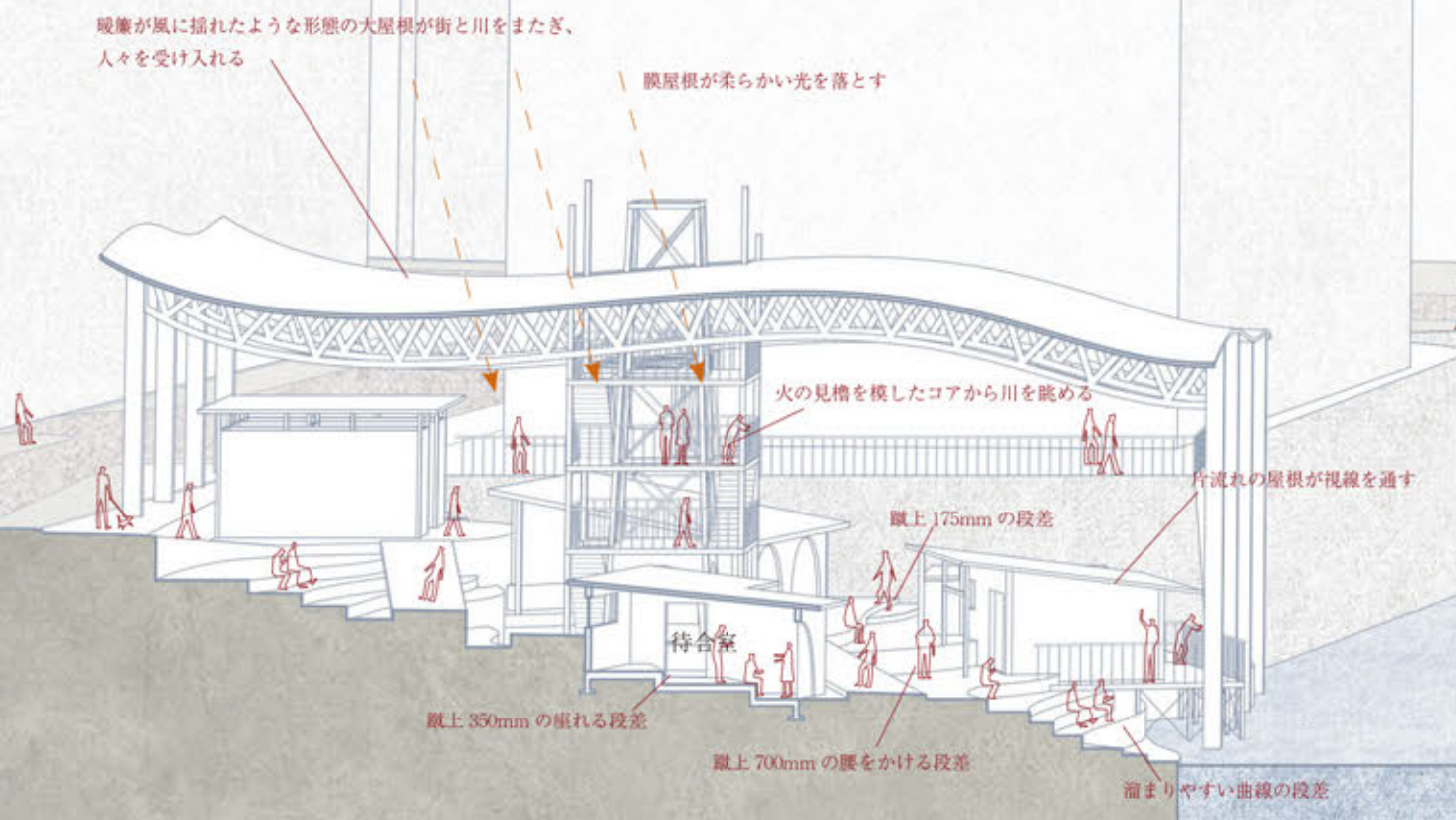


防災船着場の多くは災害時のみを想定した場所のために、日常的に利用されず認知度が低いのが現状である。また規模が極端に小さかったり、サインが設置されていなかったりなど、いざというときの備えが不十分である。そこで本計画では、防災船着場を日常利用できる場所として更新し、舟運の拠点となる場所を提案する。防災船着場が日常の一部となれば、災害時に迅速な対応が可能となるのではないかと。

03. 敷地 | 日本橋



敷地は日本橋川沿いで、首都高地下化を伴う再開発によりできる空地を選定した。地下化により日本橋川に空が戻り、スローモビリティが表に現れる。本計画では五街道の起点であった日本橋を対象とし、この新しい防災船着場を布石として他の防災船着場も更新することで、防災船着場が日常の一部になると同時に、都市の輪郭を描くように水上交通インフラが推進されることを目指す。



08. 断面ダイアグラム



1. 既存の堤防を掘削し、街と川を緩やかに繋げる。掘削してできた地盤は蹴上の異なる大きな階段状とし、小さなスーパー堤防のような、強さを担保しながら、強く隔てられた境界を解体し柔かい居場所をつくる。

2. 待合室や備蓄倉庫、食堂など、背の低い小さなボリュームを配置する。地盤の勾配に合わせて片流れの屋根にすることで、街と川を通る視線をできるだけ遮らないようにする。

09. 平面ダイアグラム



1. 待合室を中心に備蓄倉庫や食堂などを分散配置する。角度を揃えることで川に对して視線を誘導しながら、ボリュームの間に見え隠れする柔かい居場所を規定する。

2. 荷物の移動やバリアフリーを考慮し、川と街の高低差を1/12勾配のスロープで繋ぐ。

